ラバウルから生還した祖父

軍都宇都宮と銃後笠間

二度の兵役

私の祖父は、1907（明治40）年に生まれ、2001（平成13）年に94歳で死去しました。生まれてすぐに親をなくして（祖父の）祖父に育てられたといいます。今となってはどのような経緯があったのか知ることはできないのですが、戸籍によれば茨城県平磯（ひらいそ）村（現在の茨城県ひたちなか市平磯町ほか）で生まれ、五臺（ごだい）村（おおむね現在の茨城県那珂市後台〔ごだい〕）、常磐（ときわ）村（現在の茨城県水戸市の一部）と居所をかえています。しかし、その祖父も12歳の時になくします。16歳で茨城県師範学校（現在の茨城大学教育学部）にはいり、20歳で笠間小学校の教員（訓導）となり、以後73年間、笠間に居住しました。

ただし、２度ほど兵役のため笠間を離れました。１度目は近衛師団の兵士として1927（昭和２）年から1929（昭和４）年までです。志願したに違いありませんが、どのようなことから教員になったその年のうちに兵役についたのかはわかりません。近衛師団では儀仗隊でラッパ手をつとめ、昭和３年の京都御所での昭和天皇の「即位の礼」にも随行したようです。母（祖父の長女）の話だと、兵士だったころのラッパが戦後しばらくのあいだ家にあったそうです。

２度目は、徴兵された1941（昭和16）年７月から1943（昭和18）年９月までです。34歳で帝国陸軍第五十一師団、通称「基（もと）兵団」の一兵士として徴兵され、妻（私の祖母、31歳）、長女（私の母、８歳）、次女（４歳）、長男（２歳）、さらに養母（祖母の養母）を残し、その本拠地の栃木県宇都宮市に赴きました。

出征の際はおそらく他の町民とおなじように、家族全員が国鉄水戸線笠間駅頭で祖父を見送ったに違いありません。太平洋戦争開始の５か月前ですから、行き先が中国であることはわかっていたでしょう。

宇都宮の陸軍第五十一師団

私が兵役に関して祖父にたずねたのは、一度だけでした。この「基兵団」という聞きなれない名称もその時に聞いたのですが、太平洋戦争開戦の1941（昭和16）年12月８日、香港

にいたということくらいで、話はすぐに終わってしまいました。祖父がそれ以上話そうとはしなかったので、私もあえてそれ以上聞き出そうとはせず、戦争の話はそれきりとなってしまいました。母が祖父から聞いたことも断片的なもので、多岐にわたるものではなかったようです。私が母から間接的に聞いていたのは後述の帰還船の中でのことだけでした。

祖父の寡言は、父がことあるごとに大日本帝国海軍での経歴を吹聴し、いっぱしの戦争体験者？を気取っていたのとは、まことに対照的でした。父は、1945（昭和20）年、実業学校を中退して帝国海軍の飛行予科練習生となり、茨城県の霞ヶ浦南岸にあった土浦海軍航空隊で訓練を受けただけで敗戦を迎え、けっきょくのところ戦場には一歩も足を踏み入れることはなかったのです。

祖父が書き残した年譜の記述を見ることにします。年譜といっても、一昨年亡くなった母の文机の引き出しの中にあった、Ｂ４版の罫紙に１年あたり１行で書きつけたごく簡単なものです。そこにはつぎのように記されていました。

昭和16〔1941〕年　７月応召、満州、香港
昭和17〔1942〕年　広東
昭和18〔1943〕年　ラバウル、マニラ、台湾、９月帰還

宇都宮からただちに、当時「満州国」とされていた中国東北部に向かったようです。実質的には大日本帝国の植民地です。鉄道で神戸港に運ばれ、そこから船に乗り大連（だいれん）港で「満州国」に上陸したのでしょう（８月14日に神戸港から満州に向かったという、基兵団の兵士の証言があります。www.jvvap.jp/saitou_motoo.html　2017年10月閲覧）。大連は、そこから奉天、長春、ハルビンへと一直線にのびる南満州鉄道（「満鉄」）の起点であり、大日本帝国の中国侵略の最重要拠点となった港湾都市です。

（成田発北京行き旅客機の右手＝北方に見えた60kmかなたの大連港。2015年３月撮影）

中国華南からラバウルへ

祖父の属していた基兵団の「満州国」での行動内容はわかりませんが、その年の12月までには香港に移動し、前述のように12月８日の太平洋戦争開戦を迎えます。太平洋戦争は、アメリカ合州国の準州だったハワイの真珠湾にあった米軍基地にたいする奇襲攻撃をもってはじまったとされますが、前後してアメリカ合州国と大ブリテン連合王国に対する宣戦布告がなされ、大日本帝国軍は、アヘン戦争（1840−42年）によって連合王国領となった香港において、ただちに連合王国軍に対する攻撃も始めたのです。基兵団は、開戦にそなえてあらかじめ「満州国」を出発し、香港に向かっていたということです。祖父は開戦直後、香港島の地上から帝国軍機と連合王国軍機との空中戦をみあげていたそうです。

「年譜」の記述によると、そのあと祖父は大陸の広東（かんとん）省に移動します。広東省は香港島の本土側で、アヘン戦争の際、大ブリテン連合王国の攻撃目標となった広州（こうしゅう）市や、現在、上海とならぶ商工業の拠点となっている深圳（しんせん）市などがあります。基兵団は、沿岸の都市部にとどまったのではなく、後背地に侵攻（「匪賊討伐」）していったようです。

そして翌1942（昭和17）年、基兵団は、ニューギニア島（西半はオランダ領東インド植民地、東半はオーストラリア領）の東にあるニューブリテン島（オーストラリア委任統治領）のラバウルに進駐しました（下の地図は、GoogleMaps に地名を加筆）。ニューギニア一帯は、太平洋戦争における大日本帝国の侵攻の最遠地でしたが、1942年のうちにすでに制海権と制空権を喪失し、武器弾薬どころか食糧にすら事欠く状態となってしまいました。現地住民がうけた損害はいうに及ばず、熱帯雨林地帯に取り残された侵略軍兵士の苦難が始まりました。

ここで「とちぎの空襲・戦災を語り継ぐ会」が運営するウェブサイト「とちぎ炎の記憶」（https://tsensai.jimdo.com　2017年10月閲覧）によって、「基兵団」について概略をみてみます。

「基兵団」の起源となる第十四師団は、日露戦争の際、1905（明治38）年６月に小倉で編成され、ただちに中国東北部遼東（リャオトン、りょうとう）半島に派遣された後、1907（明治40）年に栃木県河内（かわち）郡国本（くにもと）村すなわち現在の宇都宮市北部を本拠とするようになりました。現在宇都宮市にある独立行政法人国立病院機構栃木医療センターの敷地に、第十四師団司令部がおかれ、衛戍（えいじゅ）病院のちの陸軍病院も併設されました。

第十四師団は、その後、1919－20（大正８－９）年のシベリア出兵、1927（昭和２）年の旅順作戦、1932（昭和７）の上海事変・満州事変に参戦し、そして1937（昭和12）年の日中戦争開始によって、大連に進駐し関東軍指揮下にはいります。戦死者3,100人をだして1939（昭和14）年８月いったん帰還しますが、翌1940（昭和15）年８月「満州国」に移駐します。

その際、第十四師団の留守部隊を中心に編成されたのが第五十一師団で、これが通称「基（もと）兵団」です。第五十一師団はただちに「満州国」に派遣されます。その後の経過についての「とちぎ炎の記憶」の記述は、つぎのとおりです。

> 第五十一師団　出征　満州派遣　華南に進出し第二十三軍に編入され、〔昭和〕17年11月ニューギニア戦線に転用され第十八軍に編入、ラバウルに進出した。悲惨な経過をたどり、16,000人の隊員のうち終戦時には2,754名となっていた。

じつにあっさりとした記述ですが、祖父のように、1941（昭和16）年までに徴兵され戦地に送り込まれた茨城・栃木・群馬の「16,000人」のうち、敗戦時の生存者はわずか「2,754名」ですから、たいへんな死亡率です。

もちろん、ニューギニアに送られたのは宇都宮の第五十一師団だけではありません。姫路の第十七師団や、水木しげるが属した名古屋の第三十八師団など、20万人の兵士が送り込まれました（『水木しげるのラバウル戦記』〔1994年、筑摩書房〕に、「基兵団」の「イバラキ人は、言葉が違うから、なんとなく異邦人みたいだった」という記述があります）。

マラリヤに罹患して本国送還

ニューギニアに投入された兵士の大半は戦病死したのですが、少数ながら戦争中に傷病兵として送還された者がいたのです。祖父がそのひとりですが、きわめて稀なことだったに違いありません。1944（昭和19）年ともなれば、武器弾薬・食糧すら欠乏するなか、傷病者の送還などとうてい無理だったでしょう。祖父は1943（昭和18）年のうちにマラリヤに罹患し、かろうじて日本に帰ることになったのです。

年譜に「マニラ、台湾」とあるのは、第五十一師団の進軍ルートなのではなく、順序から

みてもこの送還の際のルートのようです。すなわち、祖父はラバウルから、当時大日本帝国が支配していたアメリカ合州国領フィリピンのマニラ、さらに大日本帝国領台湾を経由して輸送船で運ばれたのでしょう。

吉田裕一橋大学教授の『日本の軍隊』（2002年、岩波新書）によると、1943（昭和18）年時点の陸軍兵士総数は約310万人にのぼりましたが、同年１月から８月までの戦病送還患者数は25,250人にすぎません。とりわけラバウルからの送還は、すでに1943年の時点でも極めて困難なものでした。祖父の送還前の1943年２月、ラバウルからニューギニア島への増援兵を載せた８隻の輸送船が米豪航空部隊により全部撃沈される「ダンピールの悲劇」が起きていますが、兵士たちは「竹浮環」にすがって漂流したといいます。ゴム製の救命胴衣を用意できないため、宇都宮から送り込まれた派遣軍は１人あたり２本の竹筒を国内から持参したのですが、そのため北関東から福島一帯の竹林は全部伐採されたそうです。

この時の増援兵というのがほかならぬ第五十一師団です。したがって、祖父は「ダンピールの悲劇」の生還者だったものと思われます。そしてその後マラリアに罹患して送還されることになったようです。祖父は、北上する輸送船の船内で熱にうなされながら、３人の子供達が晴れ着姿で現れる夢を見ました。祖父は、死んでいこうとしている自分に、夢の中で子供たちが別れを告げに来たと思ったそうです。これは、祖父から直接ではなく、間接的に母から繰り返し聞きました。

祖父の年譜に「９月帰還」とあるのが、帰国して宇都宮の陸軍病院に入った時なのか、それとも退院して自宅のある笠間に戻った日なのかはわかりません。マラリヤ患者とあれば、一定期間は隔離状態におかれて療養し、ある程度症状がおさまってから退院を許されるのでしょう。帰国から帰宅までしばらく時間を要したものと思われます。

陸軍病院の祖父を見舞った祖母と母

帰国して家に帰るまでのあいだのふたつのできごとについて聞いたのは、祖父が亡くなってからだいぶたってからのことで、それを語った母自身の死のすこし前のことでした。

ひとつは、出征からほぼ２年後、帰国して宇都宮の病院に入院している祖父を、母が祖母とともに見舞った話です。「宇都宮の病院」というだけなので確かなことはわかりませんが、帝国陸軍の兵士として徴兵され、マラリヤに罹患してニューギニアから送還されてしばらくのあいだ隔離されて療養していたとなれば、宇都宮第一陸軍病院以外ではありえないでしょう。宇都宮第一陸軍病院は、戦後は陸軍省から厚生省の管轄に移り、国立栃木病院をへて、現在は独立行政法人国立病院機構栃木医療センターとなっています。

陸軍病院があったのは宇都宮駅から４km以上離れた市街地のはずれでした。現在でも宇都宮駅から西方につづくメインストリートから北に折れ、商業地域から住宅街にかわった地域です。現地で見る限り、そこがかつての大日本帝国陸軍第十四師団の本拠だったことや、その一角に国立病院の前身としての陸軍病院があったことを窺わせるものはありません。ただし、敷地の南西隅には、かつての第十四師団の門柱が残されているのですが、どこにもそのような表示はありませんでした。

（埼玉大学教育学部の谷謙二准教授の「今昔マップ」による、左は昭和９年版
５万分の１地形図、右はGoogleMaps　http://ktgis.net/kjmapw/index.html）

（栃木医療センター敷地の南西隅に残る陸軍第十四師団の門柱。2017年８月撮影）

1943（昭和18）年の夏、祖母（33歳）と母（10歳）は、笠間駅から水戸線の列車に乗り、小山駅で東北線に乗り換えて宇都宮駅に降り立ったのでしょう。現在でも乗り換えに好都合な時間帯で１時間30分ほどかかります。駅頭で陸軍病院の方角を聞いて、ふたりで歩き始めたのでしょう。115機のB29戦略爆撃機による死者500人あまり罹災者10万人以上の宇都宮大空襲は、２年後の1945（昭和20）年７月12日ですから、北関東随一の市街地が続いていたはずです。母と祖母は、駅から西にのびるメインストリートを北に折れ、市街が途切れたあともさらに歩いたのでしょう。

10歳の子供だった母は、とりわけ遠く感じたようです。しかしながら、マラリアで療養しているとはいえ、２年ぶりに生きて帰った祖父に会えたわけですから、よろこびも大きかったことでしょう。

ひとり笠間駅に降り立つ

ラバウルから送還された祖父を宇都宮の陸軍病院に見舞った話につづいて、もうひとつ、亡くなる少し前にはじめて母が語ったのは、陸軍病院を退院した祖父が笠間の自宅に帰って来た日のことです。

２年前の1941（昭和16）年７月に、祖父は、ほかの出征者たちといっしょに笠間駅頭で万歳の歓呼の声に送られて宇都宮に向かったに違いありませんが、２年後の帰還はただひとりの寂しいものでした。いっしょに出征した町の人たちはまだ誰一人帰ってきていないでしょう（さきの資料によれば、戦争が終わったあとになっても、生きて帰る人は、５人にひとりもいなかったのです）。

その祖父を笠間駅で出迎えたのは、母（祖父の長女）ひとりでした。同居していた祖父母の養母は、出征の翌年に亡くなっています。祖母は家にいたのか、それとも仕事にでていたのかはわかりませんが、お国のために命を捧げるどころか病気で戦線を離脱しひとり生きて帰った夫を、世間の手前もあって駅まで迎えに行くことはできず（祖母も当時は国民学校の訓導でした）、10歳の娘にその役を託したのでした。

２年ぶりに帰ってくる夫を駅まで出迎えることすらできない社会状況について、『笠間市史　下巻』（1998年、笠間市）によってたどってみます。1939（昭和14）年１月、「警防団令」により、従来の「防護団」と「消防組」が統合され、警察の指揮下で活動する「警防団」が各市町村で結成されました。笠間町では、笠間農学校（現在の茨城県立笠間高等学校）や笠間国民学校（現在の笠間小学校）を会場とする西茨城郡内町村警防団幹部対象の防空教育訓練が実施されました。

笠間町は、結局のところ連合国軍による戦略爆撃（「空襲」）の対象となることはありませんでしたが、1943（昭和18）年３月19日から21日まで、警戒警報発令による灯火管制を実施しています。銃後奉公会が各市町村に設置され、「軍人援護体制を確立する」ために「銃後における戦意の昂揚と、戦力増強に邁進」するよう通達されています。

1942（昭和17）年２月、大日本帝国は、「大政翼賛会」傘下に従来の「国防婦人会」・「愛国婦人会」などを包括する「大日本婦人会」を結成し、20歳以上の「婦人」を強制参加させました。目的は、軍事援護事業のほか、貯蓄奨励運動、戦時生活確立運動（標準服奨励・勤労奉仕等）、健民運動（結婚奨励・結核予防）、教育訓練運動、動員運動（竹槍訓練・勤労報国隊）などの活動への動員でした。翌年６月の全国都道府県支部長会議での決議文には、次のような語句が並んでいました。

誓って飛行機と船に、立派な戦士を捧げましょう。
一人残らず決戦生産の完遂に、参加協力いたしましょう。
長袖を断ち決戦生活の実践に、決起いたしましょう。

兵士を送り出した「留守家族」や、戦死者を出した「遺家族」の家には、「誉れの家」の

標札が掲げられたようです。

下の表は、アジア太平洋戦争期の笠間地区の戦没者数です（『笠間市史　下巻』469ページ。笠間町・大池田村・北山内村・南山内村は、1955〔昭和30〕年２月11日に合併し〔笠間町〕、さらに1958〔昭和33〕年２月15日に稲田町〔旧西山内村〕を合併したうえで、同年８月１日に笠間市となります。なお、2006年２月20日に友部町・岩間町と合併し、現在の笠間市となります。）

表1-1　年度別戦没者数

年度	笠間町		大池田村		北山内村		南山内村		西山内村		計		合計
	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	
昭和7	1										1		1
12	9		3		6		1				19		19
13	5		2		3		2		2		14		14
14	5		1		5	1	2		2		15	1	16
15	6		3				2		5		16		16
16	2	1	2		4		1	1	2		11	2	13
17	5	8	2	1	5	1	2	4	2	3	16	17	33
18	47	11	6	1	11	2	6	2	16	5	86	21	107
19	109	36	32	9	48	17	45	11	48	30	282	103	385
20	91	25	27	7	38	6	37	6	51	16	244	60	304
21	15	1	4	1	9		2	1	5		35	3	38
22	2								1		3		3
不明	2		6		1		3				12		12
計	299	82	88	19	130	27	103	25	134	54	754	207	961
合計	381		107		157		128		188		961		

（茨城県民生部世話課「満州・日華事変・太平洋戦争戦没者事務取扱関係綴」昭和25年により作成）

祖父が生還したのは1943（昭和18）年９月ですから、まさに戦病死者数が激増する直前だったのです。帰還後も約２年間にわたって戦争は続き、膨大な数の死者が出ます。「陸軍」とあるのは、多くが祖父と同じ宇都宮の第五十一師団に徴兵され、ニューギニアなどに送り込まれた兵士に違いありません。人口２万人あまりのこの小さな町村で、10年ほどの間に961人の戦死者をだしているわけです。祖父は、早い時期にマラリアに罹患したもののそれによって命を落とすことなく、すでに制海権を喪失しているにもかかわらず輸送船が撃沈されることもなく、無事に帰国できたのです。ほとんど偶然というべき「幸運」が重なることがなければ、祖父は962人目の戦死者になっていたに違いありません。

祖父母と母・叔母・叔父は当時、笠間稲荷神社近くで借家住まいでしたが、おそらく留守宅には、前述の「誉れの家」の標札が掲げられていたのでしょう。しかし、多くの町民が天皇陛下のため立派に命を捧げるなか、なんらの戦功もあげることなくひとり生きて還ることとなり、その標札も取り外されたに違いありません。祖母は、宇都宮の病院まで夫を迎えにいくことはもちろん、笠間駅で出迎えることすら遠慮しなければならない状況に置かれていたのでしょう。

家から笠間駅までは２kmあまりです。宇都宮駅から陸軍病院までの距離の半分ほどとはいえ、10歳の子供がひとりで駅まで歩き、同じようにただひとり列車で帰ってくるその父を待ったのです。